

黙示録 13 章 ローマ法王教の世界支配陰謀

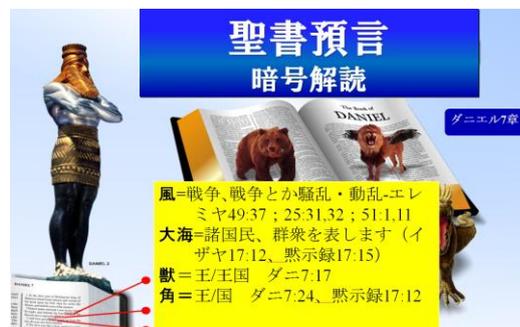
復習と序論：

先回のダニエル書 7 章の研究で、「小さい角」がヨーロッパから出現して、全ヨーロッパ全世界を支配するに至ったことを学んだ。「小さい角」とはローマ法王教である。中世時代ヨーロッパにおいて、ローマ法王至上権を行使した。しかし、「歴史は繰り返す」。今度は世界最小の国、ローマ法王教＝バチカン、世界支配陰謀、法王至上権を目論んでいる。

黙示録 13 章は、ダニエル 7 章の預言の継続であることが分かる。

4 つの獣、すなわち各時代の世界帝国の特徴を引き次いでいる。

ひょう、恐ろしい獣、バビロン、ペルシャ、ギリシャ、ローマ帝国の特徴。ダニエル 7 章の預言でローマ帝国を引き継いだのは、名前にもあるようにローマ法王教である。小さい角とはいえ、ローマ帝国よりも恐ろしい権力であることを学んだ。

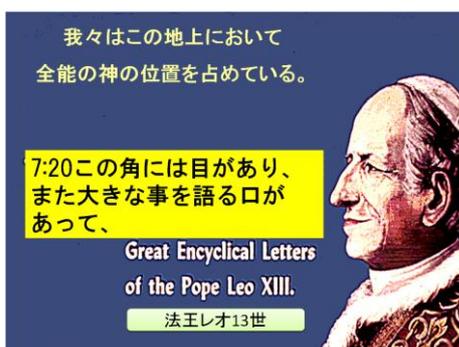


旧約聖書のダニエル書も新約聖書の黙示録も象徴的に書かれているが、二つの大預言書は互いに補足しあって解き明かすことができるようになっている。

ダニエル書 12:10 にこう書いてある：「多くの者は、自分を清め、自分を白くし、かつ練られるでしょう。しかし、悪い者は悪い事をおこない、ひとりも悟ることはないが、賢い者は悟るでしょう」。

黙示録 1:3 には次のように書いてある：「この預言の言葉を朗読する者と、これを聞いて、その中に書かれていることを守る者たちとは、さいわい(祝福される-欽定訳)である。時が近づいているからである」。

※ **ローマ法王教の制度、組織、体制のことで、ローマ・カトリックの信者のことを指しているのではないことを重々覚えていただきたい。** 黙示録 18:4 「わたしの民よ、彼女から離れ去って(出てきなさい-欽定訳)、その罪にあずからないようにし、その災害に巻き込まれないようにせよ」。エペソ 5:11 「実を結ばないやみのわざに加わらないで、むしろ、それを指摘(暴露)してやりなさい」。



13:1 わたしはまた、一匹の獣が海から上って来るのを見た。それには角が十本、頭が七つあり、それらの角には十の冠があつて、頭には神を汚す名(冒流の名-欽定訳)がついていた。

この獣は前章 12 章に現れてくる龍と似ている。

両方とも角が十本、頭が七つあり、それらの角には十の冠を持っている。黙示録 17:10 も同じ。この地上の七つの頭は、忠実な神の教会を迫害するために連続して現れてくる、サタンが用いる世界的な権力を表している。

12章と13章と17章の比較：

●似ている点：

・12章の龍—7つの頭、10の角

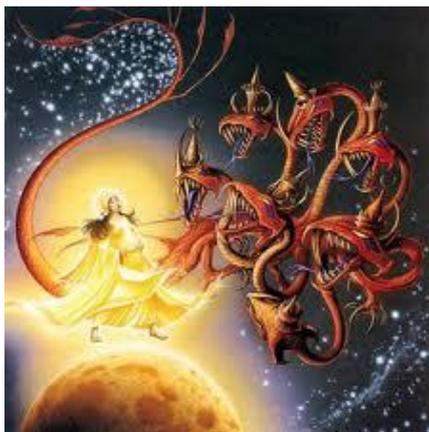
●13章—二つの違い：

・12章7つの頭に7つの冠

・13章 10の角に10冠、頭には冒流の名、12章にはそんな名前はない。

●17:7—7つの頭と10の角、冠はついていない。

ダニエル書にも黙示録にも、権力を表すのが獣で象徴されている。これらの権力がどこから出てくるか、3つの表現がある。



17章



① 海から上ってくる獣 ② 地から上ってくる獣 ③ 底知れぬところから上ってくる獣

海は人口の濃い場所(黙示録 17:15)、地は人口の薄い場所。底知れぬ所はサタンと悪天使の住まい?(ルカ 8:31, 2ペテロ 2:4, ユダ 6)

黙示録 13章には二つの獣が登場する。この二つはかつては敵同士であったが親友となる。

今晚は第一の獣(ローマ法王教)について学ぼう。

13:2 わたしの見たこの獣はひょうに似ており、その足はくまの足のようで、その口はししの口のようであった。龍は自分の力と位と大いなる権威とをこの獣に与えた。

この獣は、一体どんな権力なのか？

1. 海から上ってくる獣 - 人口の濃いヨーロッパに出現。
2. バビロン、ペルシャ、ギリシャ、ローマ帝国の特徴を持つ混合獣。
3. 第四ローマ帝国の続き。
4. ダニエル7章と同じようにローマ帝国から分裂した中から、分裂して後に出現する。すなわち、ヨーロッパから出現。
5. 宗教権力と政治権力の結合であるが、宗教権力が政治を支配するのが特徴。ダニエル7章で学んだ。
6. ダニエル 7:25 「いと高き者に敵して言葉を出し」と黙示録 13:1「頭には神を汚す名(冒流の名)と同じ特徴。

再度ダニエル 7:25 を読んでみよう：「彼は、いと高き者に敵して言葉を出し、かつ、いと高き者の聖徒を悩ます。彼はまた時と律法とを変えようと望む。聖徒はひと時と、ふた時と、半時の間、彼の手にわたされる」

この権力は、他の帝国と違う。この特徴を持つ者は、ローマ法王教以外に適用されることはない。

ローマ法王教はどのように出来上がってきたか？

龍は何を象徴しているか、黙示録 12:9 によると「この巨大な龍、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれ、全世界を惑わす年を経たへび」と言われている。

サタン(第二義的には異教ローマ)が力と位(王座 - 欽定訳、新共同訳)と大いなる権威

世界的な権力、ローマ市に王座、大いなる権威をこの獣ーローマ法王教に与えた。

ローマ法王教の特徴：

1. ひょう＝ギリシャ神話と哲学(アリストテレス、ソクラテス、オリゲン等々、
2. くま＝ペルシャの哲学(ミトラ主義、三重冠)
3. しし＝バビロンの宗教(例えば、パール、イシス、オシリス、ホーなどなど)。
4. 恐ろしい獣＝異教ローマ帝国に引き継がれ、そしてローマの皇帝自らも神と呼ばせるようになった。ローマ皇帝は、**Pontifex Maximus(ポンティフェクス・マクシムス)** 最高神祇官(さいこうじんぎかん)と呼ばせて絶大の権威を持っていた。それはそのままローマ教皇の称号ともなる。



ローマ法王教はどのように確立されたか？

1. キリストを十字架につけたのは異教ローマ帝国であった。初代キリスト教への迫害(12章参照)。300万人のクリスチャンが殉教したと言われている。しかし、ますますキリスト者は増加するばかり。「われわれはあなたがたに刈り倒されるたびに、数が増加する。キリスト者の血は、種である」(テルトゥリアヌス、「護教論」50節)。

2. サタンの妥協政策 大争闘上 35-36

「大いなる敵、悪魔は、暴力でできなかったことを、今や策略によって得ようと努めた。迫害はやんだ」。

「今や教会は恐るべき危機に陥った。...キリスト者のある者たちは堅く立って、妥協することはできないと宣言した。しかし、ある者たちは、彼らの信仰のいくつかの特徴を捨てたり変更したりすることに、そしてキリスト教を部分的に受け入れていた者たちと結合することに賛成して、これは、彼らを完全な改宗に導く手段になるであろうと言った。それは、キリストに忠実に従う者たちにとって、深刻な苦悩の時であった。

サタンは、見せかけのキリスト教という上衣をまとって、教会内に侵入し、信者たちの信仰を腐敗させ、彼らの心を真理の言葉から離れさせた」。

ついに、キリスト者の多くは、標準を下げることに同意し、**キリスト教と異教との間の結合**が成立した。偶像礼拝者たちは、改宗したと言って教会に加わったものの、依然として偶像礼拝を続けており、礼拝の対象をイエスの像や、マリヤ、聖人たちの像に変えたにすぎなかった。こうして教会内に侵入したいまわしい偶像礼拝のパン種は、その害を及ぼしていった。不健全な教義、迷信的礼典や偶像礼拝的儀式が、教会の信条と礼拝の中に取り入れられた。キリスト者たちが偶像礼拝者たちと結合したことによって、キリスト教は腐敗し、教会はその純潔と力を失った」。

使徒パウロの預言：Ⅱテサロニケ 2:3,4

「まず背教のことが起り、不法の者(罪の人)、すなわち、滅びの子が現れるにちがいない。彼は、すべて神と呼ばれたり拝まれたりするものに反抗して立ち上がり、自ら神の宮に座して、自分は神だと宣言する」と言った」。

「4世紀の初期に、コンスタンティヌス帝が名ばかりの改宗をして、一般から大いに歓迎された。そして、世俗が信心深い様子をして教会内に入ってきた。今や、墮落は急速に進んだ。異教は征服されたように見えながら、勝利者となった。異教の精神が教会を支配した。その教義と礼典と迷信とが、キリストの弟子であると公言する人々の信仰と礼拝に織りこまれた。

この異教とキリスト教の妥協が、神に反抗して立ち上がると預言された「不法の者」を出現させることになった。 偽りの宗教のあの巨大な組織は、サタンの権力が生んだ一大傑作であって、自分の意のままにこの地上を支配しようとする彼の努力の記念碑である」 大争闘下 43-44。

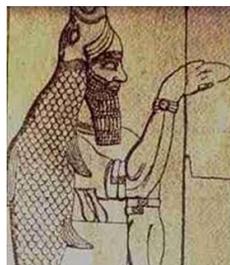
ローマ・カトリック教会とは、異教とキリスト教との形式を結合したもの！

異教の教え、習慣、礼典、儀式が侵入

異教の偶像礼拝がカトリックに徐々に侵入してきた。バビロン、エジプト、ギリシャ神話と哲学(アリストテレス、ソクラテス、オリゲン等々、ローマ帝国に残存し、ローマ・カトリックに引き継がれてい



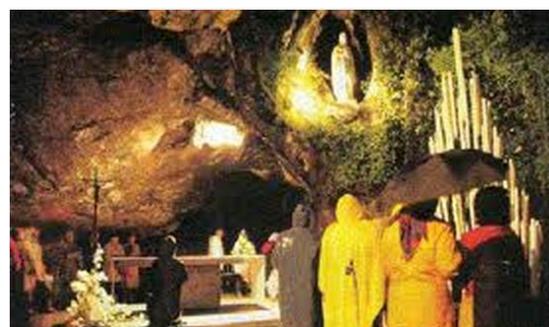
る。



救世慈母大観音 御丈は、62メートル 開眼は、(1983年) 通称・久留米慈母観音

マリア崇拜、聖職者たちに 執り成し、使徒たちによる執り成し—仲保者

テモテへ第一の手紙 2:5 「神は唯一であり、神と人との間の仲保者もただひとりであって、それは人なるキリスト・イエスである」。





パール太陽神やアシタロテ女神(月)や星の象徴がカトリック教会のいたるところで使われている。



出エジプト記 20:4-5

「あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない。上は天にあるもの、下は地にあるもの、また



地の下の水のなかにあるものの、どんな形をも造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。

しかし、カトリック教会は、十戒の第2条を変更したのである。何という冒瀆！

13:3 その頭の一つが、死ぬほどの傷を受けたが、その致命的な傷もなおってしまった。そこで、全地の人々は驚きおそれて、その獣に従い、

この獣の頭の一つが死ぬほどの傷、致命的な傷というのはどういうことか？

フランスの皇帝、バーティア将軍がローマに入り時の法王ピオ6世を捕えて投獄した。バーティアは、王政を廃止して共和政に改めることを宣言したが、法王ピオ6世がこれに従わなかったからである。それが下記に記すように1798年、2月10日のことであった。

しかし、「その致命的な傷もなおってしまった」とは、1800年3月10日に新法王が選出された。1929年2月10日60年来絶交していた法王庁とイタリア政府とがムッソリーニ首相の骨折りで和を結び、ラテラン条約に調印。バチカンが絶対不可侵の独立国となって再び地上の王となって君臨している。面積は約0.44km²の世界最小の国である。東京ディズニーランド(約0.52km²)よりも小さい。

「2011年現在、バチカンは174カ国と国際連合およびマルタ騎士団の特命全権大使を受け入れており、179の国と地域に大使あるいは外交使節を派遣している」。

バチカンの研究の専門家である赤間剛氏は「バチカンを知らずして国際政治はわからないのだ、と断言している」と言っている(バチカンの秘密序論)。

しかし、致命的な傷が完全に治って全世界を支配するのは近い将来であることが黙示録13章で分かる。

13:4 また、龍がその権威を獣に与えたので、人々は龍を拝み、さらに、その獣を拝んで言った、「だれが、この獣に匹敵し得ようか。だれが、これと戦うことができようか」。

この地上にローマ法王教と匹敵できる勢力はない。数においてはカトリックは13億と言われているが、近年においてはイスラム人口ははるかに超えて15億7千万と言われている。しかし、聖書によると地球最後の最高権力はローマ法王教である。「最小の国家にして最大の国家」バチカンである(赤間剛氏同上13)。

13:5 この獣には、また、大言を吐き汚しごとを語る口が与えられ、四十二か月のあいだ活動する権威が与えられた。

- ① 過去適用 紀元 538 年からローマ法王至上権が確立されてから中世時代に 42 か月＝「ひと時と二時と半時」＝1 年と 2 年と半年＝1260 日/年の迫害時代。暗黒時代とも言う。8 千万から 1 億のクリスチャンが殉教したといわれている。
その期間が終わったのが、上記で述べたように、1798 年であった。
- ② 過去に起こったことは、再び近い将来起こる。
「ひと時とふた時と半時＝1260 日の迫害期間(字義通り)」



「ローマ教会の計画や運営方式には遠大なものがある。この教会は、再び世界を支配するために、また迫害を復活させるために、またプロテスタントが行ったすべてのことを無効にするために、激しい決定的な戦いの準備として、その感化力を広げ、その勢力を強めようと、あらゆる手段を用いている」大争闘下 321。

この著者によると、ローマ法王教の目的とするところは何か？

- ① 再び世界を支配すること
- ② 迫害を復活させること
- ③ プロテスタントが行ったすべてのことを無効にすること(①聖書、聖書のみが唯一の権威、②信仰による義認、③信教の自由、④万人祭司)

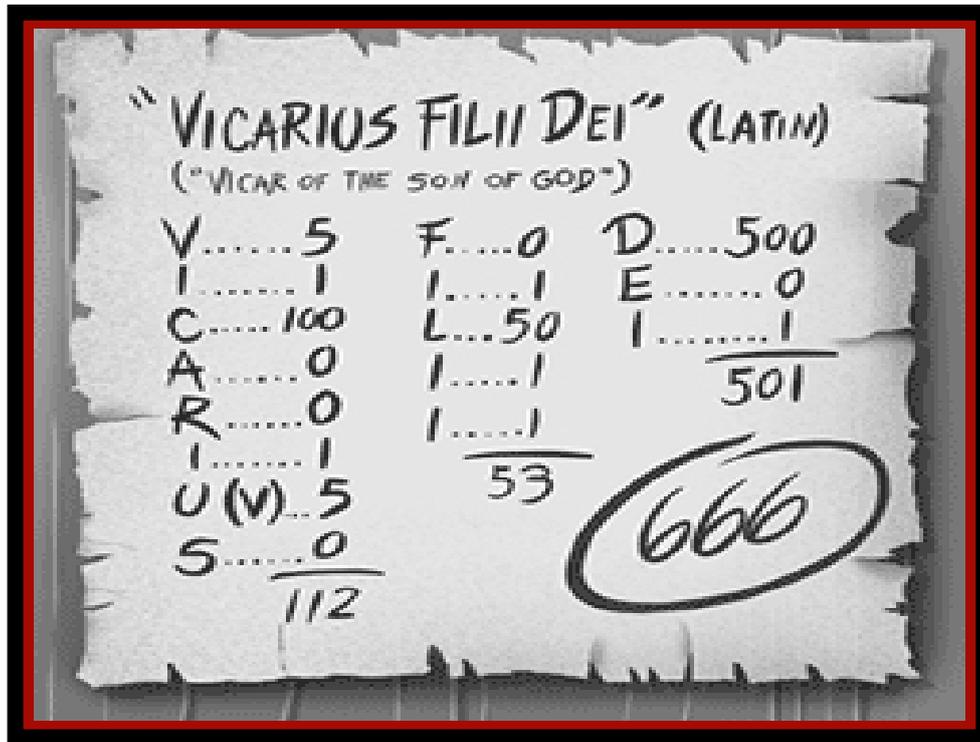
13:6 そこで、彼は口を開いて神を汚し、神の御名と、その幕屋、すなわち、天に住む者たちとを汚した。

13:7 そして彼は、聖徒に戦いをいどんでこれに勝つことを許され、さらに、すべての部族、民族、国語、国民を支配する権威を与えられた。13:9 耳のある者はきくがよい。

13:10 とりこになるべき者は、とりこになっていく。つるぎで殺す者は、自らもつるぎで殺されねばならない。ここに、聖徒たちの忍耐と信仰とがある。

黙示録 13:18 ここに、知恵が必要である。思慮のある者は、獣の数字を解くがよい。その数字とは、人間をさすものである。そして、**その数字は6 6 6**である。

ヴィカリウス・フィリー・デイ＝神の代理人



黙示録 13:8 地に住む者で、世の初めからほふられた小羊のいのちの書に、その名をしるされていない者はみな、この獣を拝むであろう(欽定訳)。

「イエスは彼に言われた、『わたしは道であり、真理であり、命である』」ヨハネ 14:6。